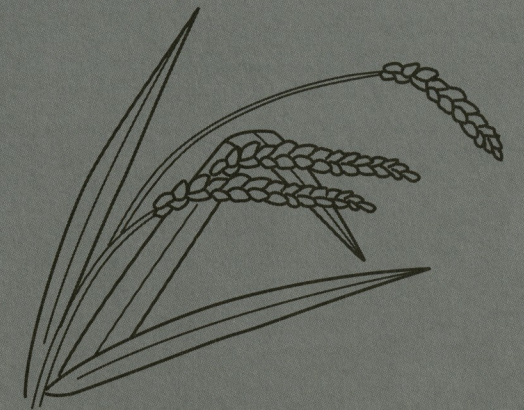


# 生きもの 博物誌

【イネ】  
中国



## 米のある風景

長谷 千代子  
(ながたに ちよこ)

本館外来研究員

### 親戚は助け合う

「今日はうちが息子夫婦の部屋を建て増しするので、弟たちの息子が三人、手伝いに来てくれたよ。田植えや稲刈りなどで人手がいるときも、近所の親戚は必ず助け合った。一日の作業が終わったら、夕食をご馳走して労をねぎらう。お金なんかでケリをつけたりしない。日雇いじゃないんだし、いずればわたしたちが彼らに恩返しする機会もあるのだから。こうやって親戚付き合いを続けていくのが、タイ族っていうものだよ。」

今年の春、調査地でいつも世話になる家を夕刻に訪ねると、普段は寡黙なおじさんが、仲間たちと囲んでいた食卓にわたしを招き入れ、いつになく多弁に話した。おじさんは、雲南省西部のミャンマー（ビルマ）国境に近い徳宏（とっこう）というところに暮らすタイ族である。タイ族

は雲南省の山間に点在する盆地などで、唐代までに一定の灌漑技術による稲作をおこなっていたと思われる人びとである。

米のある生活風景はあまりにも自然なのでつい見過ごしそうになるが、祭りや儀礼のなかでの米の使われ方を見ると、その重要性を再認識させられる。たとえば正月、人びとは親戚の家集まり、餅つきをする。足踏みタイプの杵での餅つき風景は少なくなつたが、おじさんの弟の家では、最近までこの種の杵を使つて餅をついていた。つき上がった餅は小さく丸めて扁平のばし、バナナの葉で包んで保存する。食べるときは葉を外して焼き、砂糖をふりかける。かつて日中戦争の後期に、ミャンマー方面から徳宏に侵入した日本軍が二年半ほどの地域を占領したが、その兵隊たちはこれを見て「こんなところで餅にありつけるなんて！」と大喜

びしたそうである。  
他にも、村の神を祀るときには**粳米**と白米の両方を神廟のまわりに撒き、仏像奉納儀礼の際にはポップコーンのように弾けさせた米を撒く。祖先に捧げる食品には、炊いたご飯が欠かせない。また、アジアの稲作地帯に広く分布する稲霊信仰が徳宏にも見られ、稲霊の神の腕を丁重に引く仏陀の塑像が、上座仏教寺院のなかに置かれていることもある。

### 田畑を失って

しかし現在、稲作をとりまく状況は激変している。都市近郊の村では開発のために多くの水田が政府に買い上げられ、人びとは転業を余儀なくされている。農業を続けていても、米以外の商品作物に切り替えたり、その儲けでより貧しい山地民などを小作人として雇つたりする人が出てきた。おじさんが多弁だったのは、稲作とそれになつたる儀礼や助け合いをおろそかにする人が、タイ族のなかにも増えてきたことが不満だったせいである。

田畑を失つても、都市的な生活に移行できればまだよいが、農民としての生活習慣は一朝一夕には変えられないし、まして少数民族となると、漢族が圧倒的多数を占める中国社会で就職戦線を勝ち抜くにはハンディが大きい。おじさんの息子夫婦にしても、都会での職探しに失敗して心ならずも帰郷し、わずかな田畑を村から借りて農業を始めるのである。そのおじさんの家のすぐ裏の水田はすでに潰され、近く宅地になることが決まっている。

人の世の変化をおしとどめることはできないが、せめてその変化がおじさんたちにとって幸せなものであるように、祈らずにはいられない。



徳宏(とっこう)州の棚田



正月の餅つき

タイ族の田植え  
(1998年)



右写真の最近の様子(2007年)



購入した仏像を村の寺に奉納する行列。女性たちが祝って撒いた米花がトラクターの台の縁に載っている



稲霊とその手をとるブツダの像



### イネ (学名: *Oryza sativa*)

イネ科。古来、アジア地域の主要な食糧のひとつとして水田や畑地で栽培されてきた。中国では現在毎年約1.8億トンの米が生産されている。雲南省では昔からいくつかの少数民族が稲作をおこなっており、山間に開けた盆地や山の斜面に水田が広がる。香米や紫米、軟米、扁米などといわれる米が雲南各地の伝統的な特産となっており、野生の稲の種類も豊富である。緑の革命以来、ハイブリッド種への依存が進んでいるが、伝統的な品種や農法も見直されつつある。

